まちづくりひろしま
被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第２５号（平成２８年９月１５日）
読者数：５６６名（募集中）
ﾒｰﾙ：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

欲しい　広島現象

ガリバープロダクツ代表
通谷　章

数年前だったか、「おしい　広島県」なるコピーが登場した。
このコピー、なかなかの優れものである。おしい――から浮かぶ文字は「惜しい」であろうし、「美味しい」「欲しい」などの言葉も連想させる。更には、額面通り、広島はちょっと足りないものがあるけど、いいところだよって謙虚さも込められている。一歩下がりながらも、主張すべきところは堂々と表明する、広島の良さ、広島人の優秀さを感じさせる文言といたく感心した。

昨今、岡山現象という言葉があるらしい。関東を中心に県外の人が岡山に移住する傾向を現したもので、延べ千人を超えるというから、現象といっても咎(とが)められない。この現象の起因は、東日本大震災並びに福島原発の放射能流出に依るものが大半である。
将来に不安を抱えて子育ては出来ない、原発リスクを避けたい、地震の心配が殆どない、東京までのアクセスが良い、等々の理由が重なって岡山が注目され、次々と永住希望者が流入している。それも岡山市とか倉敷市などの都市ではない。人口減少が著しく、未来には消滅の可能性が強い町とか村といった「岡山の田舎」への移住である。これ、まさに地方創生の変型版とも見てとれ、また、自主避難とも位置づけ出来る。

岡山に居を移したからといって簡単ではない。定住する――と覚悟を決めたにもかかわらず、新しい環境、隣人との付き合い、仕事の確保など課題は多い。都市の利便性を捨てたものの、過去と釣り合わない現実が実に多く横たわる。次々と直面する課題は容易に乗りきれず、撤退の憂き目にあう家族もそこそこに上っている。
だが、だが、である。同じ中国地方に位置する広島と岡山はどれほど違うのであろう。東京及びその周辺の人たちから見て、広島は魅力に乏しいのであろうか。
確かに、災害のみを比べると、後ろ向きの全国ニュースで岡山が登場することは少ない。避難民＝岡山定住希望者の気持ちを慮(おもんばか)ると、広島はやや分が悪い。その辺りも心的影響を及ぼしているのだろうか。

広島にも幾多の魅力がある。複数のプロスポーツ、平和の原点なる世界遺産、海上に優雅な姿を見せる宮島、ふんだんな海の幸……人だって悪くない。現象というなら広島に波及してもいいと思えるのに、今のところは聞かれない。温暖な気候に育まれた広島人気質は、他県に劣るはずがない。それでも岡山ほど注目されないことに残念を覚えてしまう。
何が広島現象を生まないのであろう。何が岡山に劣っているというのか。私ごときが御託を並べても始まらないが、多分、些細な「物足りない」が枝葉のように折り重なって、広島の魅力を見えにくく、捉えにくくしているのではなかろうか。

街づくりの基本的な考えに、こういうものがある。
一　今あるものは何か、今ないものは何か　二　今後つくられるものは何か、今後もつくられる予定のないものは何か　三　これから欲しいものは何か、これからも欲しくないものは何か
……要るもの、要らないものを整理して考える、マトリックスである。要と不要、二分すると理解しやすい。素直な気持ちで一つずつ検証し、解消し、現実化する。住みやすい街に近づけていく考えである。
広島も人口減少を免れない。長い先行き、減退の可能性を強めている。
減退を回避するには、出生率のアップと永住者を増やすこと。概ね、分母の増加が前提であろう。しかし、答えは簡単でもアプローチには知恵が要る。
広島に住んで欲しい、広島に永住して欲しい――都市創造に取り組む人たちの使命がここにあるように、岡山と違う広島現象を巻き起こすためには知恵が必要になる。現象は一過性だが、知恵を加味して連続性に結びつけねばならない。
欲しい、広島現象――広島らしい広島現象が創出されるのを期待し、待ち焦がれる一人に私がいる。

ひろしまのまちづくりの動き

① 二代目「平和の鐘」今年も　～響け！平和の鐘　記念式～

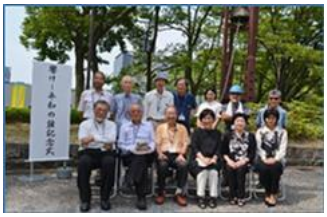
日　時：　平成 28 年 8 月 6 日（土）9：30～10：45　晴れ
場　所：　中央公園・ハノーバー庭園の南広場
主　催：　響け！平和の鐘　実行委員会

「ひろしま平和の歌」合唱

忘れ去られた二代目「平和の鐘」が、今年も原爆の日に市民の手で打ち鳴らされた。
参加者全員の黙とう、広島合唱同好会の「ひろしま平和の歌」合唱に続き、「カーン、カーン」と広島の空高く鳴り響いた。被爆 70 周年の昨年、「まちづくりひろしま」編集委員を中心に市民有志 10 人が実行委員会を立ち上げ企画したのが始まり。
記念式には「平和の鐘」を製作した関係者の遺族、原爆市長・浜井信三ご子息など約 120 人が参加し、みんなが順番に鐘を鳴らした。高松市から参加の孝岡楚田（たかおかそでん）・弘子ご夫妻は「毎年この時期、広島に来るとこの鐘を見上げます」と記帳。

鐘を鳴らす参加者

今年は「ヒロシマ平和創造基金」の支援も受けた。実行委員会は、この記念式を毎年 8 月 6 日に続けていく。ヒロシマの生き証人ともいえる二代目「平和の鐘」が、より広く世間に知られ、記念式への一般参加者が増えることが期待される。


実行委員会メンバー

終わりに、去る 8 月 29 日、平賀繁彦様がご逝去されました（87 歳）。鐘の製作に係わった関係者のうち唯一ご存命で、記念式にも毎年ご参加頂きました。ここに謹んで哀悼の意を捧げます。　（実行委員会代表　高東博視）

② 広島サッカー場はどこへ？

８月４日、サッカー場建設問題で県知事、市長、商工会議所会頭、サンフレ会長のトップ会談が初めて実現。２候補地に絞られた広島みなと公園と市民球場跡地に加え、第３の候補地を含めて再検討することで合意した。
これまでの経緯やそれぞれの立場を主張し、忌憚のない意見交換がなされ、広島のまちづくり全体を考えて検討することになったのは一歩前進である。振出しに戻るのではなく、これまでの検討を踏まえて、トップ間で早く結論を導き出すことが肝要である。
第３の候補地として中央公園の自由・芝生広場が有力視されているが、将来の県立体育館の建替え用地として残すべきではないか。むしろ中央公園の北側に位置する中層の県営及び市営

アパート敷地約５ha を押す案がある。県営はすでに廃止され、一部解体済みであり、市営も廃止予定で将来は公園に戻す計画と聞く。

隣接する基町高層市営アパートを宿泊施設等に用途変更していけば、騒音等による反対の声も解消されていく。この地のメリットは交通の便の良さと地域の回遊性を高めることである。広さにゆとりがあり、マツダ・スタジアム同様のユニークで楽しいサッカー場が建設できる可能性を秘めた場所だ。

みなと公園案もＪＲ宇品線を復活させるぐらいの大胆な発想をもって港湾施設との共存共栄を図る必要がある。海外では商業施設を併設したスタジアムの成功事例が多くあり、国の方も競技場を核にした複合施設を支援する制度を検討している。ここは知恵の出しどころだ。

（編集委員　瀧口信二）

○ 広島の復興の軌跡（第２０回）～原爆ドーム～

5 月にオバマ大統領が平和記念公園を訪問し、スピーチの後、原爆の子の像の脇に立って原爆ドームを遠望し、立ち去った。外務大臣がどんな説明をしたかはわからないが、大統領は事前に十分なレクチャーを受けていたであろう。そして想像を働かせてスピーチの草案を練ったに違いない。原爆ドームは被爆の凄惨さを今に語りかける生き証人だ。

広島県物産陳列館の誕生

現在の原爆ドームは 1915 年（大正 4 年）に広島県物産陳列館として建てられた。広島県の物産品を販売促進する拠点である。明治期の広島は、特に 1894 年（明治 27 年）に起きた日清戦争を契機に軍都の道を歩み、大量の軍需品を地元で調達し、活況を呈していた。その経済的発展の流れを拡大する目的で作られた。

この建物はチェコ人のヤン・レツルの設計で、一部鉄骨を使用した煉瓦造の建築。外装は石材とモルタルが施され、両側が３階建て、正面中央部が銅板の楕円形ドームを載せた５階建ての洋風な建物。周りはほとんどが木造２階建であり、川面に映える美しい姿は広島名所の一つとなる。

戦前の姿

その後の変遷

1921 年（大正 10 年）に広島県立商品陳列所と改称し、同年に開催された第４回全国菓子飴大品評会の主会場となる。1933 年（昭和８年）には広島県産業奨励館と改称し、産業奨励だけでなく美術や博物等の展示会場としても利用され、広島の文化振興の役割も担う。

内部の陳列ケース

しかし、戦争の激化につれてより産業奨励に重点が置かれたが、さらに激しくなると館内の展示も縮小の一途をたどり、1944 年（昭和 19 年）３月末には産業奨励館の業務を廃止。内務省中国四国土木出張所や広島県地方木材株式会社等の官公庁や統制組合の事務所として使用された。

被爆後の姿

1945 年８月６日、一発の原子爆弾で市街地の建物は倒壊し、廃塵に帰す。爆心地から約１６０ｍの産業奨励館は、爆風と熱線を浴びて大破し全焼したが、垂直に近い爆風のため中央のドーム部は奇跡的に倒壊を免れた。

被爆後の姿（川本俊雄撮影）

建物内部で勤務していた職員は全員即死。原爆ドームそばには内務省（建設省）職員殉職之碑が建立され、市主催の平和祈念式と並行して毎年慰霊式が行われている。

内務省（建設省）職員殉職之碑

一面の焼け野原から復興が始まり、バラックの小屋が軒を連ねる中、ドーム状の鉄骨が残る産業奨励館の残骸はいつの頃からか「原爆ドーム」と呼ばれるようになる。

原爆ドームの保存及び補強へ

復興とともに全半壊した被爆建物も修復或いは解体が進められていく。産業奨励館廃墟も危険であり、被爆の悲惨な思い出につながるので、取り壊すべきという意見も多かった。

1949 年に広島平和記念都市建設法が制定され、恒久平和を実現しようとする理想の象徴として広島平和記念公園構想が本格化する。その設計コンペで丹下健三氏は原爆ドームを起点とした南北の軸線を設定し、一躍原爆ドームのシンボル性が高まった。

1953 年に原爆ドームは広島県から市に譲与され、ほぼ被爆後のまま保存されていたが、1960 年代に入ると風化が進み、崩落の危険が生じた。市も保存には経済的負担がかかるため、保存には消極的であったが、核廃絶と世界平和を実現するためのシンボルとして保存を求める世論の声が大きくなる。1966 年に広島市議会が原爆ドーム保存を要望する決議を行い、市は寄付を呼びかけて国内外から浄財を集め、1967 年に最初の保存工事を行った。

その後も 1989 年に２回目の保存工事、2002 年に３回目を行い、2016 年には初の耐震補強工事を終えた。

世界遺産に登録

1992 年、日本が世界遺産条約に加盟したのを契機に、原爆ドームを世界遺産に登録しようという機運が生まれた。1993 年には市民団体「原爆ドームの世界遺産化をすすめる会」が結成され、国会請願のための全国的な署名運動が展開される。この請願は 1994 年に国会で採択され、国は 1995 年に原爆ドームを史跡に指定し、世界遺産委員会に世界遺産として登録するよう推薦。

世界遺産登録の石碑

1996 年 12 月、「人類史上最初の被爆の惨禍を伝える歴史の証人として、また、核兵器廃絶と恒久平和を求める誓いのシンボル」として原爆ドームの世界遺産登録が決定された。

バッファゾーン

原爆ドームの周囲には良好な環境を保つためにバッファゾーン（緩衝地帯）が設けられている。市は 1995 年に「原爆ドーム及び平和記念公園周辺建築物等美観形成要綱」を策定し、国際平和文化都市の象徴にふさわしい景観の形成に努めることとした。2006 年には広島市景観条例を制定したが、原爆ドームエリアと道路一本挟んだ敷地に高層マンションの建設が発覚すると、景観論争が巻き起こり、イコモス（国際記念物遺跡会議）から「原爆ドームに関する勧告」を受ける羽目になる。

現在、同じようにかき船移設問題が発生し、訴訟中である。平和大橋の下流にあったかき船をわざわざ原爆ドーム近くの元安橋下流に移設し、すでに営業している。市は 2014 年に景観条例規則と景観計画まで作っておきながら、かき船は建築物に当たらないという理由で規制の対象から除外している。バッファゾーンの公的な川面を一営利企業に利用させるという本末転倒の行政の判断に多くの声なき市民が疑問を感じている。**今一度、世界遺産の原爆ドームが持つ使命を肝に銘じたい。**

今後の課題

長年風雨に晒されるとどんな建物も風化して朽ちていく。現在のドームも時間とともに劣化して姿を変えていくのは避けられない。市は 2006 年に「今後の保存工事の基本的方向」を定め、可能な限り現位置において現状を保存するための必要な劣化対策を実施するとある。将来的には鞘堂や覆屋、レプリカ等の保存方法も想定されているが、その時点での英知に期待したい。

世界遺産に登録されて海外からの訪問者が増えてきたが、ドームを見て原爆の悲惨さを感じ、平和記念資料館で被害の全容を知り、慰霊碑で手を合わせて終わるというパターンが多い。その後、現実の生活に戻るまでの余韻に浸れる場所が少ない。最近オープンした「おりづるタワー」はその適所の一つとなろう。さらにドームに相対した球場跡地エリアのバッファゾーンが最適地となるよう環境整備をする必要がある。

この球場跡地エリアは、平和記念公園で被爆の実相を理解し、平和について学び・考えたことを行動に移すための場として、平和活動や平和文化を発信する集いの場、来訪者の憩いの場、賑わいの場となることが求められているのではないか。

＊参考：広島市のＨＰ「原爆ドーム」　　（編集委員　瀧口信二）

○人物登場：三分一博志氏（建築家）

略歴：建築が地球の一部になることをテーマに瀬戸内に根ざした設計を行う。「犬島精錬所美術館」（岡山）で日本建築学会賞作品賞、日本建築大賞を同時受賞。
「宮島弥山展望台」（広島）からの眺望は、『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』で三つ星になるなど海外の評価も高い。
その他代表作に「直島ホール」（香川）、自然体感展望台「六甲枝垂れ」（兵庫）など。
現在、デンマーク王立芸術アカデミー教授（非常勤）。

9 月 23 日にグランドオープンする「おりづるタワー」の設計者三分一氏から話を聞く機会を得た。氏は 2011 年に犬島精錬所美術館で日本建築学会賞作品賞他を受賞し、広島で活躍する建築家である。最近の作品の設計を通して建築に取り組む姿勢を紹介してもらった。

☆ 直島ホール（2015 年完成）

直島は香川県の瀬戸内海に浮かぶ島で、瀬戸内国際芸術祭２０１６が開催中。16 世紀末に城が築かれた城下町で碁盤目状の街区が今も受け継がれています。2 年半の集落調査の結果、風・水・太陽の動きから集落が形づくられ、建物の配置と平面計画がなされていることがわかりました。

直島ホールは町が運営する町民会館で、ホールの大屋根は直島に多く見られる入母屋形式で風穴を開け、直島の風と屋根の関係から生じる圧力差によって風が抜けるように設計しています。

直島ホール（所有：直島町）
（撮影：小川重雄）

☆ おりづるタワー

築４０年近いビルを広島マツダが買い取り、改修して平和の象徴的な建物として蘇らせ、屋上等の一部を観光客や市民に開放しています。

はじめて既存建物の屋上に上ったとき、心地よい風が吹き抜け、眼下に映える緑と川、山々や島々に囲まれたパノラマに改めて感動を覚え、市民や海外の人たちにこの広島の美しさ、被爆からの復興を手助けした広島の風を体感してもらいたいとの思いを込めて屋上の「ひろしまの丘」を設計しました。

また従来のタワーのようにエレベーターで一気に展望台まで上がるだけでなく、スロープを歩いて上ることも可能で、だんだんと風が抜けていくことを体感できます。川の干満や街を歩く人びとやその暮らしも見え、広島の街らしい身の丈の高さになっています。

左下がおりづるタワー
（中国新聞、撮影：福井宏史）

☆ 動く素材「風・水・太陽」を活かす

風や水、太陽などの動く素材は地形から生まれています。その地域固有の動く素材を理解し、それに適したかたちを与えていくことで街や集落の文化、歴史、習慣が育まれます。

建築の動く素材は人類・宗教・時代を超えた共通の言語であり、建築が地球の一部となることをテーマにいつも取り組んでいます。

☆ 広島のまち

広島は風と水を通して呼吸しているまち。夏には凪を挟んで昼の海風と夜の山風が交互に吹き、空気が入れ替わります。川も 6 時間毎に上下３ｍの潮の干満を繰り返し、水が入れ替わります。この太古から変わらぬ自然の営みが広島のまちを浄化し続けてくれました。

風と水こそ広島のまちの基本であり、特に風をリレーしていく形を追い求めています。それはおりづるタワーに込めたメッセージでもあります。

ひろしまの丘からの展望

＊参考文献：「三分一博志　瀬戸内の建築」（ＴＯＴＯ出版）
http://www.toto.co.jp/publishing/detail/A0357.htm

ひろしまの丘

＊コメント＊　ひろしまの丘に上がると、吹き抜ける風が心地よく、眺めも良い。読者の皆さんも**ひろしまの風**を感じに一度登ってみてはいかがでしょう。

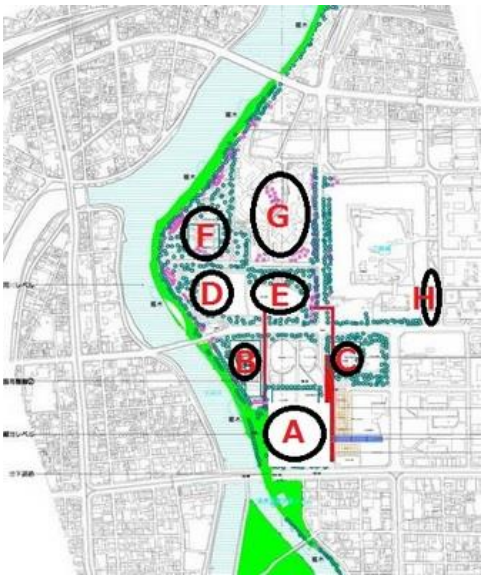
聞き手：編集委員　前岡智之、瀧口信二（文責）

○ ひろしま市民ひろばの提案！

２０１１年に広島市中央公園アイデアコンペを終え、地元の建築家として何か提案しなければという思いから、日本建築家協会中国支部広島地域会のまちづくり委員会で検討し、ひろしまのグランドデザイン「ひろしま市民ひろば」をまとめた。２０１３年３月に広島市に報告し、各種イベントにおける展示・発表等で多くの意見をいただいた。さらに議論の輪を広げるため、具体的な提案を順次紹介していく。

ステップ２．公共施設の適正再配置及び新たな機能

全体の配置計画は、周辺とのつながり及び平和記念公園と中央公園のバランスを重視し、被爆 100 年を見据えて柔軟性をもった段階的な整備を基本とする。



全体のゾーニング計画案

全体のゾーニングについて（案）

A：新たに国際文化交流機能を備えた公共施設と一体となった広場を中心に据える。日本及び広島の伝統文化を学び、伝承する機能。原爆ドームと平和記念公園と並ぶ新しいブランドとなり、観光客が必ず立ち寄りたくなる場所。

B：ファミリープールはＤゾーンに移し、既存の公共施設を適正再配置する。

C：中央図書館をＢゾーンに移し、将来の建替え用地とする。

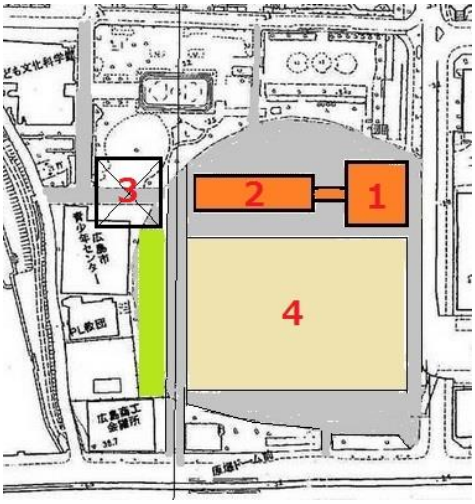
D：ファミリープールを移設し、夏以外も子供たちが自由に遊べる場とする。

E：将来の県立体育館の建替え用地とし、当面現在のオープンスペースを維持する。

F：広島サッカー場の建設候補地。その場合、川に近い高層アパートは宿泊施設等に用途変更。

G：高層アパートは順次、用途変更し、寿命がくれば当初の公園計画に戻す。

H：川沿いにある商工会議所等の民間施設の移転候補地とする。



Ａゾーンのステップ２の配置計画案

1：ビジターセンター・文化交流館

2：展示棟（地上はピロティ）

3：日本文化芸能ホール（仮称）
（青少年センター移転後）

4：ひろしま市民ひろば

Ａゾーン（球場跡地エリア）について（案）

ステップ２の段階では、まだ既存建物が残っている状況なので、球場跡地内の計画とする。

平和記念公園・原爆ドームとつなげるため、南北の丹下軸線を通し、それに直交させて建築群（**1**・**2**・**3**）を配置。平和記念公園の建築群と対峙した型をとり、**2**はピロティ形式で北側の公園へのゲートの役割を持たせる。

1：平和記念公園と中央公園全体の観光サービスを行うビジターセンター及び茶道・華道・書道等の日本文化が体験できる文化交流館（仮称）の合築

2：２階は多目的に利用できる展示空間で本館と渡り廊下で連結

3：伝統芸能の神楽、能、歌舞伎等が可能なホール

4：フラワーフェス、平和祈念式等のイベント時はサブ会場として休息所。海外の国々の日を設定して各国のお祭り会場、他。

イメージ（平和記念資料館）

（日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会　瀧口信二）

○瀬戸内の集落の話し（第２回：「祝島集落」の後編）

森保洋之（広島工業大学名誉教授）

今回は、祝島集落の「株（かぶ）」と集落形成との係りについて、お話しします。

ここでの「株」は、農業株と云え、概ね、農業を主な生業とし、田畑を開墾し分け合うことや、冠婚葬祭をめぐる暮らし、等々の相互扶助的な生活組織として、古くから機能してきたものである。祝島集落では、江戸後期：寛政年間以前に、その形態は現れており、「株」の仲間の住まいの位置は、基本的には、近所ほかの場・空間範囲に捉われない“土地開墾時の組織”である。ある土地の開墾許可を得た後、数人で協力して開墾する形態を「株」と云い、開墾した土地の分与する主体を「株の本家」、その「株の本家」と土地を分与された複数戸の「株の分家」を総称して「株うち」と云う。これには、主に親戚関係の本家と分家が存在するが、親戚関係にない「株の分家」が存在する場合もある。また開墾した土地を「株の本家」が「株の分家」に分与することを「株分け」と云う。

現在、明らかになっている祝島の「株」の数は 53 株で、これらは集落全体に配されている（**図1**）。祝島の「株」に関連して、民俗学者：（故）宮本常一氏は、①祝島では「土地均分」が行われた。②農地の所有状況として「株うち」制度があった。③「土地の割替」も行われた。④末子相続で均分相続。⑤本家・分家間の秩序は弱く、土地の所有観念は比較的弱く、家族労働に応じて土地を持つという共有観念が強い。⑥株は、始めは 12 株であり、50 株内外にまでになった。等々を指摘している。このうち、⑤の土地の所有観念の弱さや、共有観念の強さは、空間の共用利用を「可」とする生活意識上の基盤となっており、前報で触れた共用空間の多さ・他に繋がる。更に③の内容は、共有地の一定期間の個人的利用であり、古い時期に「株うち」制度を基礎に、住民合意で行われた「土地の活用・保全」を目途とするものと云え、大いに注目される。

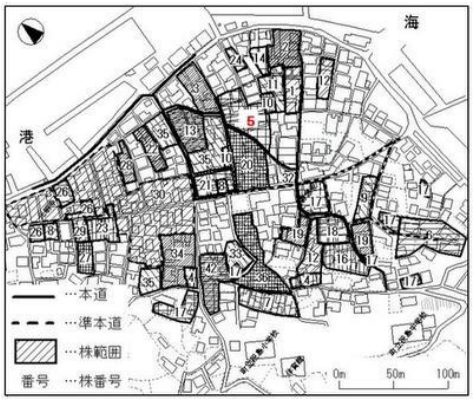


図１　祝島集落の株範囲（集落の東側部分）

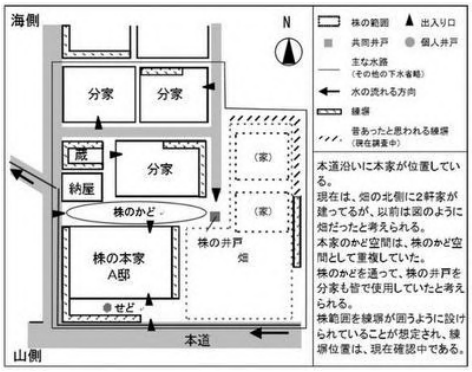


図２　上図の株番号：５の集合型の株範囲（模式図）

「株範囲」の構成形態をみると、「集合型」（1 ケ所集合型）、「分離型」（2～3 ケ所分離型）、「分散型」（多く分散型）等の 3 種がある。このうち「集合型」の例数は圧倒的に多く、次いで「分離型」で少なく、「分散型」は極少数と云える。このことから、「株」の仲間の住まいの位置は、実態としては、近所ほかの場・空間範囲に捉われる場合が多いと云えよう。なお、何れの型も、株範囲の中を、集落内に古くからある主要道は殆ど通らず、また「株の本家」は、主要道沿いにある例が多く、「株」の範囲・まとまりを大事に、集落が形成されたことが窺える。株の構成戸数は、幅はあるが、概ね 3～5 戸程度である。「株」の構成要素は、⑴本家・分家、⑵畑、⑶井戸、⑷水路・下水、⑸練塀の **5** つであり、「集合型」のＡ邸を中心とする「株」範囲（**図2**）は、この 5 つ全部が含まれ、本家には、近くに「株」で使用した共同井戸があり、本家の門（かど）は、株範囲の状況から、「株」の門（かど）としても機能していたものと考えられる。

一方、祝島集落には、「トウド」という古くからの仕組みもある。これは、土地・田畑開墾時の相互の労働提供（使役）であり、主に農作業、屋根の葺き替え作業、練塀づくり等々を行ってきたものである。「トウド」は「田人」と表記する地域もあるが、祝島では漢字で表記していない。一般的に言われる結（ユイ）と同様のもので、前掲の「株」の範囲で「トウド」を組み、

土地・田畑開墾を行い、その後、「株分け」等が行われたと見ることができ、農業集落的性格がよく窺える。

前報の「門（かど）」について再整理すると、家の外構えの出入り口、門（もん）の前・廻りの場と云う≪家側の場・空間的な私空間≫であるが、一方、家と道の中間の空間的な場でもあり、日常は近隣交流空間、祭事の際は祭事用品作成の作業空間と云う≪共空間≫的な場でもある。故に、飽くまで「株」や「トウド」のような組織的なものではない。また、「門（かど）」には、奥の中庭等への通路的場となる≪通り抜け通路型≫と≪そうでない型≫がみられる。

他方、集落には、場・空間から発展した≪組織的なもの≫としての「門（かど）」的なものもある。これは、道に沿って展開される「（前報の）路居」と云う住宅集合の括りや、「株」と云う組織が、前掲のように、近所範囲と云う纏まりとして成立している場合が該当し、これらは謂わば、元来の「門（かど）」と「株」の中間的な存在と見ることができる。祝島の「トウド」は、「株」と共に、この「門（かど）」と「株」の中間的なもの、夫々に存在していよう。

結局、当集落では、共同の仕組みとしての「株」の役割は大きく、「株」を通して、集落空間の構成要素・形式等が紐解け、「株」が集落形成に深く係わる存在と云える。以上の結果、「“家”は“部屋”、“道”は“廊下”、“集落の外周路で古くは神輿を担ぎ回った神輿道（みこし道）”は“屋敷の外周路”」は、祝島集落全体を「住まい」に喩えた表現と云えるが、これに、「“集落人”は“家族”」を加え、本集落の特徴を言い当てていよう。

今年のお盆（8／16 からの５日間）、祝島では、４年に一度の海を渡る神事「神舞」が開催された。その奉賛会の会長も務める祝島の橋部好明氏の多大なるご協力・ご支援があって、本研究は成立したことを記して、ここに深謝致す次第です。以上で祝島の話しは終了です。次回は平郡島の２集落の話しです。

○こまちなみシリーズ⑫

金沢市はまちの歴史を色濃く残した、ちょっとした町並みを「こまちなみ」として守り、育てるまちづくりを進めている。これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介してきたが、市内周辺から広島県内に対象を広げていく。

銀山街道・上下宿

前々回訪ねた府中・出口通り、市街地を背に緩やかな坂道を上り詰めたところの三室橋、そこから急峻な山道に入る。坂根峠越えである。ここから上下宿までの銀山街道はおよそ２０キロ余り。今は県道府中上下線に取って替わられているが…。

銀山街道（石州街道）は１６世紀、銀を産出していた石見の国、大森から赤名峠を越えて三次、吉舎、甲奴、ここから二つに分かれて尾道に至る道と上下、府中、神辺、笠岡へのルートがあった。この間、約１３０キロ、当時は３泊４日の行程で牛馬３００頭、人足４００人が往還したという。

案内図

さて、上下宿。江戸時代には幕府派遣の代官のいる天領であった。明治以降も金融業を中心に豪商が軒を連ね、賑わいを見せていた。しかし、今はその面影はない。

ＪＲ上下駅から５０㍍ほどのところ、突き当りを右に行くとメインストリート、白壁となまこ壁が続く街並みがおよそ５００㍍。右手に見える尖塔のある建物がこの街のシンボル、上下キリスト教会。旧財閥、角倉家の土蔵で、広島県文化百選にも選ばれている。しかし、現在改修中で覆いが掛かっており全容を見ることができない。その向かいが上下歴史文化資料館、旧岡田邸である。ここの長女、

美知代が自然主義文学の代表的作家、田山花袋の「蒲団」のモデルである。この小説は日本における私小説の出発点になったと言われている。建物は持ち主が度々代わった為、創建当時を偲ばせるものは軒先や室内の梁、柱などごく一部であるが、和室の一部を再現、のちに女流文学者となる美知代の著作物などを見ることができる。

ここを出てさらに歩くと左手に見張り櫓が目に入る。明治初期の警察署、花袋が「備後の山中」でその印象を記している。ここが十字路になっており北方向を見ると正面に木造の大きな建物が見える。大正期に建てられた中国地方唯一の木造芝居小屋「翁座」、翁橋を渡り緩やかな坂道を歩いて５分ほど。中が見学できるかと思いきや大きな錠が掛けられている。戦後映画全盛期には大いににぎわったとか、しかし昭和３５年に閉館、その後工場などとして使われたが、萩本欽ちゃんなどのテレビ取材をきっかけに修復・修理が行われ「芝居小屋」として復元している、という。パンフレットによると回り舞台、花道、２階の桟敷席、特に手摺は京都南座を模したと云われる見事な細工が施されている。現在はイベントなどで公開されるだけとは勿体ないことだ。

金毘羅さんの金丸座は四国に春を告げる風物詩としてすっかり定着している「四国こんぴら歌舞伎大芝居」が行われ、全国からフアンがやって来る。愛媛の内子座は８月の文楽の公演、これには数年前に行ったことがあるが、町を挙げての支援体制が敷かれている。いずれの小屋も翁座と同じように芝居小屋としての存続の危機に遭いながら、見事に復活しているのである。要は復元したハード（翁座）を活かすソフトを創り出すアイディアとこの翁座が町に人を呼び込む重要なツールであるとの認識を共有できるかどうかであろう。この芝居小屋の前に立ち「残念」な気持ちで一杯になった。

（筆者撮影）

踵を返し駅に向かう途中、一軒だけ戸を開け放している建物があった。中に入ると青年が一人出てきた。藤原幸大さん、地域おこしに取り組んでいるＮＰＯの理事長さん。彼は旧府中市から上下町に通い、国の助成などを受けながらこの建物（瀬川商店）の修復に取り組んでいるという。藤原さんによると「町中の旧家は間口は狭いが奥が深い。この建物も間口１５ｍ、奥行きは６０ｍもあり、県道まで続いている。これだけでも一見の価値がある」と。藤原さんは福山大学の学生などボランティアを募り、イベントを仕掛けているようだが、まだまだ緒に付いたばかりの印象を受けた。

よく町の活性化を進めるには「よそ者、若者、馬鹿者」と云われるが、そこに住む人が彼らを遠巻きにしているだけでは真の活性化は出来ないだろうとの思いを、人気のない街を歩きながら強くした。

（編集委員　三宅恭次）

○*読者からの投稿*

かき船のその後

世界遺産・原爆ドームを守る会　事務局長
馬庭恭子（広島市議会議員・中区）

今年の夏は特別に熱い夏でした。大統領の来訪熱と連日のオリンピック熱とカープ熱・・そして、山積する市政課題への論戦。サッカー場がどこへ、などなど、目が離なせません。さて、かき船のその後です。「りっぱな建物ができたね」「あれ船なの？」「夜も営業してるんだね」「高級そうだけど、高いの？」「イタリア風の料理があったり、和風があったりでごちゃまぜだね」などいろいろな声が聞こえてきます。

まず、かき船がバッファゾーン（緩衝地帯）に出来上がるまでの今までの工事を観察した報告をします。最初にサルベージ船がきて河川の浚渫を行い、川底には石を敷き、その上にそれが崩れないように金網をかけていました。しばらくするとタグボートに引っ張られて、大きな本体がやってきて、その後、屋根工事が始まり、予想を超えた高く太い鉄の船止めの杭が本体

を挟むように、２つ川底に打たれ、太い鎖で建物を固定しました。内装工事が始まり、外からは工事の進捗状況が見えないように、幕が張られました。
　伐採反対と声をあげた河岸の樹齢３０年、５０年の桜の樹木はあっという間にチェーンソーで５本伐採され、そこにはかき船にわたる通路となる橋が増設されました。かき船への入口は、スロープになっており、まわりは植栽で見えないようにしています。しかし、船の冷暖房室外機はドーム側の側面につけられています。しかも、電気、ガス関係の機器は河岸緑地の道路側に２個設置してあります。

　国も市も口をそろえて、「かき船は船であるから、随時移動が可能である。そのため、下水管も固定していない」と説明し、だから、「建物ではなく、船なのだ」と主張するのです。そして、ついに昨年の９月からかき船は、営業開始となりました。世界遺産が近いのに景観審議会もかけず、地元の合意もはからず、一私企業に国の一級河川を独占させることを「良し」とした・・国と市。罪は深いです。

　私たちとしてはその場所での営業を阻止したいので、国が河川敷地の占有許可をしたことが問題だとして、その許可取り消しを求める裁判を起こすことになりました。福山の鞆の浦裁判で活躍した弁護士など３人の協力を得て、現在、第４回の意見陳述をし、その後、弁護士会館で報告会を行い、７月には全国で裁判となった事例をもとに公開シンポジウムも行いました。
　紙面では書き足りない戦いがまだまだ続きます。ご支援をお願いします。

○*アンケート調査の結果報告*

　前号のアンケートに４人から回答をいただいたので紹介する。**ご協力に感謝！**

・回答者は 50 代・60 代の男性で、広島市内在住は１名、3 名は市外の人である。
（Ａさん）・広島が好き？→好きか嫌いかと言われれば好きなのかな～。
　・何が好き？→　なんだろう。いままで、大分、大阪、仙台と引っ越してきましたが、それぞれの土地で、いろんな人と出会いました。住んでいる時に、『こんなまち、きらいだ！』と思ったことはありません。結局住めば都ということでしょうか。
（Ｂさん）・広島が好き？→どちらでもない。世界の広島として日常的に都市としての在り方を真摯に追及されていることに敬意を表しますが、好き嫌いというとらえ方ではなく、外から目線で見守っていきたいと思っています。
（Ｃさん）・何が好き？→地方都市でありながら活力があるところ。
　・どうして好き？→出身が山口県岩国市であり、いわゆる周防に位置しており、長門は福岡博多の文化圏に影響を受けているが、周防は広島の文化に影響を受けているため、身近に感じる点。
　・さらによくするには？→日本経済は少子高齢化社会に突入し、更に東京への一極集中化が促進されつつある。このような流れに抗う方法は、従来型の第２次産業の育成や誘致では無理で、第３次産業のサービス産業におけるインキュベーション機能を地方商店街につくるべきである。若者の起業ができるプラットフォームを人材育成からファイナンスまでの仕組みをつくること。
（Ｄさん）・何が好き？→ ほどほど都会で自然も豊か。特徴のある地域。スポーツが盛ん。
　・どうして好き？→生まれ育ったところなので。
　・さらによくするには？→新しい産業・事業を起こしやすい、起業しやすい街に。町・地域の景観を守る、作る。
　（意見・感想等）
　　「おりづるタワー」についてどう思いますか？バッファゾーンの中で、現在は規制できていないとしても、ドームに近く威圧感のある建物です。旧・東京海上ビルより容積も高さもあるようです。商工会議所やＰＬも問題ですが、こちらも対岸の平和公園側から眺める時に目立ちます。一部を寄付するにしても展望台の料金も高過ぎませんか？ベースはオフィス・テナントビルです。景観規制について市はやる気がないようです。

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会（第１４回 ）」開催

・語り人：岡河貢氏（広島大学准教授）　宮森洋一郎氏（建築家）
・テーマ：広島ピースアンドクリエイト 2045　は何を残したか―鼎談による序論的展開
・開催日：２０１６年９月１６日（金）１８：３０～２０：３０
・会　場：合人社ウェンディひと・まちプラザ　研修室Ｃ（北棟５階）
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）
・会　費：１０００円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
・参加申込の連絡先：広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX：082-223-7226 メールアドレス：nisimar5@hotmail.com
・主　催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表　石丸紀興）

□編集後記

我らの広島カープが 25 年ぶりにリーグ優勝。みなさんおめでとうございます。振り返ると、カープ球団が初優勝したのはリーグに参加して 25 年目の昭和 50 年だった。

『広島現象』、どこの都市とも比べない、自信に溢れる市民ホスピタリティの確立に期待する巻頭言は、多くの議論を呼ぶことでしょう。画一的でないひろしま独自の歩む道を求めていきたいのです。また、評判の"広島の復興の軌跡"も 20 回を迎えて、次回からは人物シリーズが始まります。――――――これまでがあったから今がある。今があってこれからが始まる。今を生きる私たちは何をしたらいいのか、今すぐできる事は何かを考え続けていきましょう。

そういえば、まちづくりひろしまも今回で第 25 号とは、縁なものだ。

（編集委員　前岡智之）

＊メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は５００字程度以内でお願いします）

アンケートにご協力ください！

Ｑ１．あなたは広島に好きな場所がありますか？

・ある――――――
・どこが好きですか？　・どうして好きですか？
・どんな時に、どんな風に利用していますか？

・ない――――――
・嫌いな場所はありますか？　・どうして嫌いですか？　・どうしたらよいと思いますか？

Ｑ２．あなたの属性を教えてください。

・性別（男・女）　・年齢（何十歳代）　・住所（広島市内・市外）

＊アンケートの回答は、下記にメールで送信ください。

回答先：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp（広島アイデアコンペ実行委員会事務局）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視　心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次　元中国放送役員